五通目の手紙

グルバハ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
五通目の手紙

【Nコード】
N6673I

【作者名】
グルバハ

【あらすじ】
死んだ人から手紙が届く。
それには、理由があった。
五通という制約の中で、手紙を誰に、そして、何のために送るのだろうか？

プロローグ

僕は、死んだ。
呆れるくらい、唐突に。
覚悟はしていたが、目を閉じると、二度と開くことは無かった。

真っ暗だった視界が急に明るくなり、遠退いていく、自分の姿を確認した時になって、初めてすべてを理解した。

僕は死んだのだと。

そして、僕は、天国にいる。
世間一般で言う、天国のイメージとは程遠い。
そもそも、こちらの人々は天国とは言わないらしい。
こぞって、第二の世界と呼んでいる。
単に、死を受け入れられないのか、ここが今まで過ごしていた、社会と大差がないためなのか、第二の世界と呼ぶ。

僕は、今、本人による死亡届けを出している最中だ。
受付の担当者は、一般社会の受付よろしく、事務的としか言いようがない。

「どうも、あなたの担当の楠木です」
淡々と話しかけてくる。
「えぇと、小野高次さんで間違いないですね」
「はい」
「とりあえず、この太枠の部分の項目を記入してください」
あまりに淡々と進んでいくので、現実感が薄れていく。
そもそも、現実感がわくほうが不自然だ。
なぜ、自分の死亡を自分で届けなければならないのか。

そんなことばかり考えていると、ペンが全く動いていないことを指摘されたので、慌てて必要事項を記入する。

記入し終わり、ペンを担当者に返すと、次は、パンフレットを出してきた。
「何ですか、これ？」
「タイトル通りですよ」

事務的な口調で、担当者は言う。
「いや、皆さんね、死後の世界は、素晴らしいと信じきっているので、実状を知らせて、残り僅かな時間で理解してもらうんですよ」
「何をですか？」
「一週間後に、消えちゃうことを、です」

あまりに、清々しい笑顔で話すので悪い冗談にしか聞こえない。

「どういうことですか？」

「だから、消滅するんですよ」

「消滅ですか？」

「えぇ、消滅するんですよ。まぁ、痛くも痒くもないんで、心配しなくても、いいですよ」

「逆に心配ですよ」

「いやいや、もう死んでるんですから心配の必要は無いでしょう」

そう言って、担当者は声を出して、笑った。

「これから、一週間、まぁ、思い出に浸っていてください」

「いや、ちょっと」

僕が喋ろうとすると、担当者は立ち上がり、鍵を差し出した。

「202号室ですからね。間違えないように。後がつかえてるんで、早く部屋にどうぞ」

それだけ言うと、彼は、次の人の相手を始めた。

僕は、仕方なく、その場を後にした。

担当者に言われた通り、自分の部屋を探す。

ホテルのような建物を見つけ、足を進める。

自動ドアが開くと、そこには、小綺麗なエントランスホールが広がっており、受付カウンターまで、存在している。

ここで、また、僕は本当に死んだのかという疑問が頭をもたげてくる。

それを、必死で抑え込み、自分の部屋を探す。

202号室は当然ながら、二階にあった。

鍵は開いている、と聞いていたので、ドアノブをひいた。

部屋はまさしく、ビジネスホテルの一室のようで、また、現実味が薄らいでいく。

シャワーを浴びる必要も感じられなかったので、ベッドに身を投げ出した。

そして、あの時のように、目を閉じた。

遠退く意識。

接近する記憶。

僕は、その狭間で眠りに落ちた。

目を覚ますと、もう、一日が経過していた。
仕方なく、パンフレットを手にとり、眺めてみる。
そこには、死亡者の心得なるものや、死亡者の権利なるものが記されていた。

そのうちの一つに、手紙があった。
生前、伝えられなかった思いを手紙にして贈る、というのだ。

馬鹿馬鹿しい、と思いながらも、手紙を書こうと決心した僕がいた。
それには、理由がある。

エントランスホールに降り、フロントに尋ねると、葉書を渡され、
「五通までお願いします」とだけ伝えられた。

僕は、部屋に戻り、机に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6673i/

五通目の手紙

2010年10月14日01時05分発行